

修 士 論 文 要 旨

学籍番号 21GH101 第 号

氏 名 後藤 展維

人文社会科学 専攻 (コース: 文化芸術)

論文題目

小川国夫の短編集『生徒会長』から考察される私小説との関連性と文体意識の独自性について

本論では、作家の小川国夫によって執筆された短編集「生徒会長」に所収の四つの短編（「若木さえ」「生徒会長」「学校嫌い」「オディル」）を取り扱いながら、小川の作品傾向が、私小説とどのような関連性を持つのかについて考察する。これと同時に、小川の文体意識が、これまでの文学の系譜と比較して、どのような独自性を有していると言えるのかについて、明らかにする。

小川は自らの作風について、大まかに「三筋の流れ」に分類できると主張している。一つ目は、聖書の世界を変形させた物語。二つ目は、故郷の大井川流域（現・静岡県藤枝市）を舞台にした物語。三つ目は、自身の経験に潤色を加えた私小説風な物語である。

このうち、三つ目を「私小説風」としたことに関連して、小川国夫は、志賀直哉等の私小説作家を私淑し、その作風に影響を受けていたという事実が知られている。一方で、これが原因する形で、「三筋の流れ」が主張される以前より、一部では私小説の系譜で作品を捉えようとする解釈も存在している。ただし、いずれの見解も、それぞれが根拠とする視点に統一性が見受けられず、適切な議論が未だ不十分である。

また、小川の文学史的な位置付けは、戦後文学の中でも最後尾にあたる、「内向の世代」として分類されており、政治的・実社会的な外部のイデオロギーに対する批評性が薄く、自己の内面やその解体の描写ばかりに描写の比重を置いた作風を持つとして、近年至るまでは批判的な意見に晒されていた。

しかしながら、小川の文体意識や実践されたテキストを分析してみると、特に、その語りの構造に関して、私小説とは明らかに異なる点が多く指摘される。そして、こうした様相が最も顕著に発現していると思える作品が、短編集『生徒会長』に収められた四篇である。

短編集『生徒会長』の四篇は、このうち三つ目の「私小説風」としての作風及び文体の方法が応用された、虚構（フィクション）である。しかし、それぞれの短編の視点人物はすべて、小川国夫自身をモデルとして造形されており、結果的に、半ば自伝的な作品としての意味合いを帯びている。

本短編集は、全編共に共通した語りの構造を形成しているが、いずれも過去の「私」を語る現在の「私」の存在が、作者である「私」を細分化して造形されているという、重層的な仕組みを成している。これは、虚構の視点人物が作者であるという、私小説における単純な構図とは決定的に異なっていると判断できる。

また、自己のアイデンティティを多重化させる方針で「私」を描くという試みそのものが、近代的な自我への反証であり、こうした側面において、小川の作品には、これまでにはあまり見受けられなかったような、文体の独自性を構築していると評価できる。